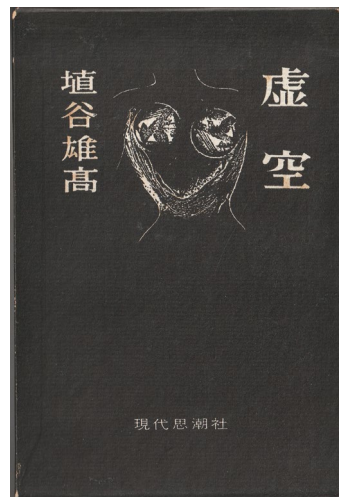
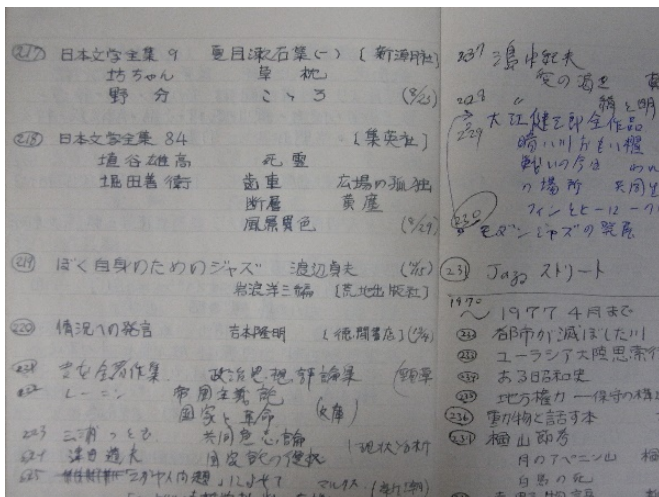


水道ジャーナリスト・有村源介の

源流 本流 汽水城

NO. 33 「東日本」から10年、『死霊』と『虚空』



大学4年目、1969年の読書メモ。

本棚から『虚空』が出てきた

この後2年留年した。確かに読んだ痕跡が・・・

2021年5月、世の中の話は新型コロナウイルス感染症の拡大、それも変異型ウイルスの恐怖に
慄いているという状態だが、つい2か月前には東日本大震災から10年を迎えたことから、
TV、新聞は一斉に特集番組・特集記事を組んでいた。10年が経過して、「今だから分かる」
といった防災・科学的知見を集積したものや、被災者と支援に関わった者ら、それぞれの立
場からの10年の歩みやその後の変転を紹介しており、全体として、見ごたえ読みごたえが
あった。

その理由は、この災害がまさに未曾有の大災害で、ありとあらゆる分野に影響を及ぼし、
多くの人々の人生を変えてしまい、地球的規模の影響があったことを表している。しかも「地
球的影响」は今後、どのような事態を引き起こすのか、まったく想像がつかないという恐ろ
しい状況にある。

即ち、溶け落ちた炉心がどこにどれだけどんな状態であるか全く分からず、廃炉の方策
(技術)も確立しておらず、核廃棄物の最終処分場所・方策も見通しがたっていない。汚
染水は本当に、何十年にもわたって海に放流し続けるのか。

核兵器は2020年1月時点で1万3400発あり(ストックホルム国際平和研究所・シプリ
年鑑)、人類を何度も全滅させるだけの数があると聞いている。しかし、核兵器は「管理さ
れている」だけ、まだマシなのではないか、と、素人には思える。しかし、福島第一原発の
核は、どんな状態になっているか分からず、地震と津波で傷んだ建築物の底に、むき出しの
まま存在している。これ以上の恐怖はあり得ないのではないかと、思うが、そういう状態の
ところにコロナ感染症が蔓延し、北海道・宮城沖・福島沖・茨城内陸・トカラ列島で地震が

頻発している。

東日本大震災が発生した時、私個人の立場は、35年間勤務した上下水道業界紙を2007年に退職し、フリーの水道ジャーナリストとして活動を開始して4年弱が経過したところだった。惨憺たる現場や多くの人命が失われたこと、さらには1人1人の人生が大きく変えられてしまったことに思いを巡らすことよりも、「兎に角、現場に出かけて取材し、報道しなければならない」という意識が強かった。『水と水技術』（オーム社）という”MOOK”（ムック＝マガジンとブックの中間）と、池上健慈という個性的にして優れた編集者に巡り会ったという幸運もあった。被災地には、発災後1ヶ月を経ていなかった時点での神戸大学の高田至郎調査団、続いて水道政府調査団、水環境学会による見学会等々、7回訪問したが、ほんの極一部、限られた現地しか訪問できなかつたし、深く掘り下げることが出来なかつた。それだけ被災地は広大であり被害は深く大きく、全ての活動を停止して現地に張り付くという態勢を取らなければマトモな取材は不可能で、「浅く、そこそこ広く」という取材を選ばざるを得なかつた。

マスメディアによる3.11関連企画は、TVも新聞（購読は朝日と日経）もできる限り目を通し見たつもりだが、そうした企画の中で驚いた記事は、「埴谷雄高『死霊』を読む会」が福島市の本カフェで開催されていたという記事であった。驚いた、というよりも、感心したというか。「へーっ」と思った、というのが正直な気持ちだった。記事は「昨年未まで（中略）開かれた。」とあり、「昨年未まで開かれていたが終了した」のか、昨年未に開かれて、まだ続けている」のか、この記述では判断できない。よく見ると、「東日本10年」企画ではなく、独立した企画だった。しかし、掲載時期といい、「フクシマ」といい、10年を意識した企画、あるいは、読者が意識することを狙った企画だと理解した。

この記事のインパクトが強かつた理由は、私の理解力というか、知能では永遠に理解できない、遙か宇宙の彼方にあるとしか思えない作品（と言ってよいものかどうかすら判断できない）を、福島市の本カフェで6人の男女が読書会で取りあげ、議論していたということによる。しかも、会の名前が、「埴谷雄高『死霊』を読む会」。恐らく、読書会すら希有な存在になりつつある今日、よりによって「死霊」とは、と感じてしまったのである。

青春時代のごく短い期間、私は薄っぺらい文学少年だった時期があり、埴谷雄高も当然、読むべき対象の一つだった。私が学生時代を過ごした1966～1972年は激しい学生運動が繰り広げられ終焉していった時代であり、同時に多くの文化（カルチャー、サブカルチャー）が重層的に誕生した時代だった。水面下で、あるいは一部の学生たちに限られていたかもしれないが、ある種、知的な流行があつた。例えば、晶文社なる出版社から出された一連の出版物は、サイの商標と独特の装幀とも相まって、本屋の書架でも目立っていたし、一部の学生たちは晶文社の新刊を話題にできることをプライドにしていた。植草甚一、つげ義春、フ

ランソワ・トリュフォー等々。ポール・ニザン『アデン・アラビア』について、先輩の「さすらって帰国した後、フランス共産党に入党して戦うんだよ」という台詞をなんて格好よいんだろう、と思ったりした。

そういう時代の空気の中でも、埴谷雄高は特別の存在だった。その内容を全く理解できなかった、という意味で特別の存在だったのである。「死霊」で微かに記憶していることと言えば、文中で主人公(?)が友人を紹介する時に「彼は自同律の研究をしているんですよ」という台詞を言ったことと、同じく埴谷著の「虚空」を読んだ(実際には文字面を”見た”に過ぎない)ことの二つのみ。

そして、一番大きかったショックが、記事にはルビがふってあり、「しれい」とあったことである。50年以上、「しりょう」と思いこんでいた。当時の埴谷雄高に関連した書籍の、どこにもルビなどふっていなかった。いや、ふってくれていなかった。

水道という一業界とはいえ、もの書きを生業としていながら、私の読書量の少なさは、もはや自慢できるほどのレベルだと虚勢を張っているが、何とか支えているのはインタビュー・対談・座談会・現場取材と執筆の数量だと自負している。しかし、後、10年程に寿命が迫っている現在、日々刻々と体力が落ちており、取材行為は限界に近づいていることを実感している。されば、「人生最後の教養」として、『死霊』と『虚空』へチャレンジするか?否、待て、この二作への挑戦はとてつもない体力と知力を要し、一挙に寿命を縮めるのではないか。